

花き

【トルコギキョウ】

1 抑制作型

(1) 栽培管理

① 温度管理

花芽分化適温、花蕾数、ブラスチングの発生等の品質面からみて、最低夜温13℃程度になったら加温を開始します。開花促進を目的に加温する場合、通常より高めの15～18℃を目標に管理します。

10月中旬以降は開花が遅れるため、日中の温度管理は通常より高めの27～30℃を目標に換気を行い、開花の促進に努めます。

② 換気

昼夜の温度差が大きくなるために、ハウスを閉めるようになると早朝の湿度が上がり、葉の枯れた部分へのかびの発生や花卉にシミが出たりします。朝早めの換気や暖房機、循環扇などの稼働により、施設内の空気を動かしてください。

③ ブラスチング対策（蕾の枯死）

ブラスチングの発生要因として、日射量不足や低温といった生育環境と出蕾後の窒素の吸収量が影響しています。また、品種による差もあります。

低温短日条件では、光合成量の低下により花への光合成産物が少なくなり、ブラスチングが発生します。また、発蕾期以降の窒素量が多い場合には、側枝の小花にブラスチングの発生が見られます。対策として、品種選定や出蕾以降の過剰な窒素の溶出を防ぐための施肥管理が重要となります。

④ 水管理

切り花間近になると、品種によっては茎折れが出やすいものがあります。節間の間延びを防止するため、かん水を控えめにし、蒸らさないよう換気します。さらに出蕾以降は1日の温度差を小さくするようにします。

2 普通作型（1～2月定植、6～7月出荷）

(1) 種まき

品種は早生～中生種の中から選定してください。市販の育苗培土を使用し、種子が微細で発芽率が良いことを考慮して厚まきにならないよう注意します。288穴、406穴などのセルトレイを利用する場合は2～3粒まきにし、発芽が揃った頃に1本に間引きます。トルコギキョウは発芽に光が必要なので、は種後の覆土は行いません。

は種後は種子の流出防止と床面の乾燥を避けるため、発芽揃いまで底面から吸水させて管理するのがよいでしょう。

(2) 温度等管理

発芽適温は20～25℃です。このため、有孔ポリなどを被覆し、ビニールトンネル、夜間は保温マットを被覆するか温床線等で加温管理してください。発芽が7～8割程度揃ったら有孔ポリ等を除去します。発芽後は、夜温10～15℃、昼温25℃を目標に管理します。育苗中にアザミウマ類が媒介するウイルス感染防止のため、殺虫剤の散布とともに、雑草・他品目との共存を避け育苗ハウスを清潔に保つよう心掛けてください。また、トンネル内の水滴が培土に落ちると立ち枯れが出やすくなりますので、資材は結露しにくい材質のものを使うなど注意してください。

【リンドウ】

1 リンドウ切り花後の管理

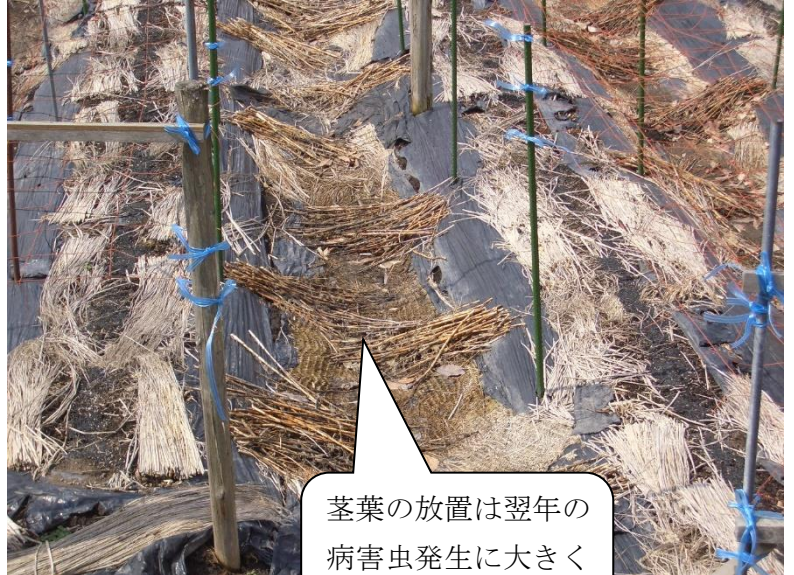
切り花後も来年に向けて、乾燥時のかん水、除草、病害虫防除を行い株の充実を図ります。来年の病気の発生を抑えるためにも、ほ場の残渣を片づけ、株もとから地際を丁寧に防除することを心がけてください。10月頃、株もとにアブラムシが集まるので防除し、ウイルス病の感染を防ぎます。

(1) 茎葉処理

茎葉は完全に枯れた後、刈り取り処分します。残さは、病害虫の越冬場所になるので、畑の周辺にそのまま放置しないようにしてください。なお、1年目や枯れ上がりの極端に遅い品種は無理に刈り取らず、翌年の春に刈り取ってください。

積雪地帯を除いては、凍み乾きから株を保護するため、敷きワラを行い、ネットを下げて風で飛ばされないよう抑えます。

多量の敷きワラには野ネズミが集まるので、翌春は早めに通路へ広げます。



茎葉の放置は翌年の病害虫発生に大きく影響します。

(2) 翌年の基肥施肥と越冬準備

茎葉刈り取り後、マルチを切り取った場所やマルチ下へ施肥します。

z

初年目は、窒素成分3kg/10a、2年目以降は窒素成分で6kg/10aとします。越冬前は、防寒を兼ねて、株上に3cmくらいの厚さの敷きワラをしてネットを下げて、押さえておきます。雪の多い地帯ではモグラやネズミの巣になり、株を持ち上げたり、かじったりするので敷きワラは行いません。